第４回わかやまリノベーションまちづくり構想検討委員会　議事概要

日　時　平成 28 年 11 月 14 日（月）午後６時～午後９時

会　場　ミートビル（和歌山市卜半町 33）

出席者　嶋田委員長、梅田委員、片山委員、樫畑委員、武内委員、豊田委員、永瀬委員、吉川委員、依岡委員

主な議事

１　開会

２　これまでの委員会の主な発言と和歌山の空間資源について、資料に基づき説明
（商工振興課　國生）

３　今回の趣旨説明について、説明
（嶋田委員長）

４　テーマレクチャー「豊かな空間資源と未来の暮らしを結ぶ 」（松村　秀一氏）

５　各委員の取組紹介
（片山委員）

６　講演「公共空間資源の正しい使い方～２１世紀バージョン～」（西村　浩氏）

７　フリーディスカッション

松村さん　伏虎中学が小中一貫校になると、伏虎という名前はなくなるのか。

榎本班長　残る。

松村さん　お城の名前と一緒で、名前がなんといっても格好よい。

嶋田委員長　虎が伏せるというのは格好よい。

松村さん　割と教育熱心になっているのではないか。ふるさと回帰支援センターで、過疎の山村に首都圏から移住する事業を行っている方によると、小さい子はよいが、彼らが高校生くらいになったときにどうするかという問題がある。移住に関して言うと、自分たちが高等教育を受けてきたにもかかわらず、自分の子どもに受けさせられないという状況が起こりうる。教育の問題が一番ネックになるという話であった。和歌山に移住してきた人たちが、市内でそういう教育環境のところに再度移住する、あるいは子どもをそういうところに送

り出すということがありうるかもしれない。

嶋田委員長　東京や大阪で教育を受けるよりも質の良い教育、最高の質の教育を作れるのではないか。第４世代くらいになると、偏差値がないかもしれない。

松村さん　あと、和歌山大学がどうなっていくか。和歌山大学はとても遠いところにあるのか。

梅田委員　市駅から難波にいく孝子峠を越えて、みさき公園の手前にある。

松村さん　それだとここまで学生は来ない。

嶋田委員長　学生がもう飲みにいけないと声をあげてくれた。学生が、友達を30 人集めるから週末の夜にバスを走らせてくださいと言って、豊田委員にお願いしている。

松村さん　学生はどこに住んでいるのか。

嶋田委員長　学校の近くに住んでいる。大学の近くの飲み屋で飲んで、そこに飽きると大阪に行く。

梅田委員　特急電車がふじと台に停車する。

嶋田委員長　和歌山の財が大阪に吸い上げられていることが問題だと学生が言っていた。

松村さん　それはとても重要。エリアリノベーション的なことを行っているところは学生の力を使っている。和歌山大学の学生がまちなかに来る交通手段があれば有効。

梅田委員　ふじと台に住宅がたくさん建ち、小学生がとても増えている。その中で教育熱心な方々がまちなかに住所を移し、子どもを伏虎義務教育学校に通わせようと転校を考えているというお話を聞いている。フォルテワジマの周りには、子どもが遊ぶ場所、公園がない。学校が終わり、子どもたちが家に帰るまでに遊ぶ場所がない。大人も昼休憩にのんびりする場所がない。フォルテの屋上に外の空気を吸いに行くくらいしかない。

松村さん　空いている場所が多いのに、そういう場所がない。

梅田委員　また、駐車場がほしいところに駐車場がなく、土地が余っているところには駐車場がたくさんあると感じる。

吉川委員　小中一貫校ができる場所の南側に公園があったが、今はもう使えない。桜の木も全部切られている。ぶらくり丁から出て、フォルテワジマの横を通り、そこを公園にしようというのは、とても良いア

イデア。公園が実現できれば非常によい。

松村さん　本町通りが和歌山の中心だという認識がある。夜７時台に、都会だと思っていた本町通りには車が一台も通っていなかった。事実上の歩行者天国。ときどき通る車は、結構スピードを出しているので、気を付けなければいけないというだけのこと。事実上、夜の７時台から誰も通っておらずとても驚いた。やはり自動車が通れない道を相当作っていけるだろうし、それを作ったほうがよい。西村さんの素晴らしい話を聞いて、これはいけそうだと思った。

嶋田委員長　交通政策上は、交通量の調査をしてから具体的に作っていくというプロセスなのか。

西村さん　現実的にはそうなるが、少しずつやりながら体感していくことが大事。実験でもよい。短い期間の実験から少しずつ延ばし、その状態でも渋滞しない状態を確認する。今、駐車場だらけであるため、道路を通らなくても駐車場を通ればアクセスできる場所もたくさんできると思う。そういうエリアを見つけ、そこを狙っていけばよい。

嶋田委員長　ポポロハスマーケットを、フォルテワジマの前も含めて、PLUG くらいまで延伸したらよい。

梅田委員　フォルテワジマの駐車場の入り口がある。

西村さん　臨時駐車場との利用権の交換等により、民地のまま公共的に使える状態に変えていく仕組みを、固定資産税の減免も含めてマネジメントしたらどうか。

鈴木さん　和歌山市の都市計画部長を務めている。補足すると、大新公園の地下駐車場と本町公園の地下駐車場は休止中。耐震の問題も当然あるが、営業的に芳しくなかった。周りの駐車場が安いため、開けるだけで赤字になる。PPP でアイデアを募集したが、今日ほどおもしろいアイデアは出て来なかった。京橋の駐車場と大新の駐車場と本町の駐車場をどうするかという答をいただいたが、どうするのか全くイメージがわいていない。

西村さん　公共交通を作ると同時に、使ってない駐車場を市役所職員が利用し、公共交通で市役所に通えばよい。そこで上がった利益が結果的にまちなかの駐車場の人たちに還元され、まちなかの空いている適切なエリアが子どもたちも楽しめるエリア、公共空間として使われるという状態になれば、皆公共交通に乗る。そういう組み合わせで

考えると、すぐできる気がする。こんなに良い条件が揃っているところはほかにはない。

嶋田委員長　全部揃っており、その組み合わせと編集の仕方だけだと思う。

鈴木さん　西村さんの言うとおり、駐車場のデマンドの大部分に市役所という大規模事業所がかんでいる気がする。昔に比べると車通勤の職員は減ってきていると思う。その人たちはどうしたかというと、恐らく自転車やバスで通勤している。嫌々でもバスを使っている人が車通勤に戻る可能性もある。公共交通の維持も含めて考えないといけない。

西村さん　公共交通を維持することも非常に大変であるため、駐車場から移動するときに公共交通を利用すると、公共交通も少し見通しが立つ方向に向かう。その組合せを考えるとよい。

岡﨑さん　この近くで教育事業を展開している。今思いついたが、不人気の駐車場を子どもアトリエにするのはどうか。子どもたちが自由に描ける場所を作る。子どもにとって駐車場は、暗くて怖い場所でなかなか寄り付かない。駐車場の壁をキャンバスにし、ペンキやチョーク、画材だけを置き、その一角で子どもたちが自由に描ける空間があれば、そこに駐車するかもしれないし、駐車場のイメージ自体が変わっていくのではないか。

嶋田委員長　子どもたちの親がそこに駐車してほしいということ。

岡﨑さん　子どもたちにとっては、暗い場所は秘密基地的な感じで結構楽しい場所なので、よいかと思った。

池田さん　第１回の委員会で、まちなかに農地を作ったらよいと提案した。まちなかの保育園で子どもに農産物を教えるため、ダンボールで田んぼ、畑、大根、ニンジンを作り、これが農業、農産物だということを教えていたことがあったが、これはひどいとなり、ベランダに農地を作り、そこで大根やニンジンを栽培し、その保育所は和歌山県農業教育賞を昨年受賞した。子どもの教育にとっても、まちなかで農地を作ることは大変大切。住宅を撤去すると、固定資産税が６倍くらいになると思う。だから、皆空き家で置いている。それを逆手にとり、まちなかの空き家や駐車場を農地に変えると、固定資産税が住宅建っている水準にすれば、皆農地を作るのではないかと思う。そういうことも市職員に考えていただきたい。また、市民会館もまちなかにできるが、その屋上に農園を作ったらどうか。そうい

う市民会館も全国にはあると聞いている。どんどんまちなかに農地を増やしていただきたい。

嶋田委員長　豊島区でも、古い木造の賃貸アパートを解体して農地にしたらどうかという話をした際、やはり固定資産税の議論が出た。大阪で建物を壊した瞬間に生産緑地みたいにして、固定資産税を上げないというところがあるらしいので、和歌山市も検討してはどうか。そうすれば、駐車場より固定資産税が安くなるため、部活動のように会費を取って農業をするというのが事業として、緩やかに成り立つのではないか。

寺田さん　和歌山市の農林水産部長を務めている。市街化区域の農地については、国の考え方が変わってきている。市街化農地は国土交通省の所管で、宅地化されるべき土地という考え方に沿って進んできた。それが、市街化農地についてもあるべきもとして、農地として残していくという考え方が進んでいる。そのための基本法整備もでき、基本計画も策定された。この後、地方においても計画を作っていく必要があるが、相続税の問題がある。20 年間農業を継続することにより、相続税の納税が猶予される制度や生産緑地制度がある。この制度をもう少し流動化できないかということで、貸借契約ができないか国において真剣に議論されており、ここ１、２年の間に結論が出ると思われる。この貸借で農地が使えるようになると、まちなかにおける農業での利用もできてくるかと思う。これは地方でできる制度ではないため、国の動向を見ながら和歌山市としても取り組んでいくという状況である。

嶋田委員長　まちなかの空き地は農地としてどうなるのか。

吉川委員　やりたい人は多いと思う。

嶋田委員長　農地家守をしてはどうか。

片山委員　農家になる前は、22 年ほどサラリーマンをしていた。当時、大阪まで通っていたが、都会で仕事帰りに農業ができればと思っていた。肥料をたくさんあげる農地、農薬をあげる農地、農薬も肥料もあげない市民農園があってもよい。健康に気を付ける人は無農薬、立派な野菜を作りたい人は肥料や農薬もあげるという、多様性のある農地ができたら選ばれるのではないか。

寺田さん　仕事の関係で相手をするのは、JA など旧来からの組織が非常に多い。和歌山市の就農者は 60 代、70 代ということで、高齢化、後継者

不足が耕作放棄地等々につながっている。この委員会に３回参加し、市でサポートできないかと考えた。和歌山の旧市街地で和歌山地産のものを使って飲食業をしたいのであれば、農業委員会にも話をしているので一度相談していただきたい。利用権を設定し、農地を利用することは、市街化調整区域であれば可能。店で売る農作物を自分で作るということであれば、相談いただきたい。ただ、農作物は素人がすぐ作ることはできないため、作ることからいろいろ勉強し、トレーニングすることにより、まちなかの駐車場等々が農地に転用されたときにすぐスタートできるようになる。

西村さん　　嶋田委員長の高品質の教育は、和歌山の中で何を示すのかもう一回考えたほうがよいと思う。学校で学ぶことも高品質の教育主体ではあるが、和歌山のこのエリアはこういう教育をするまちだという定義付けもよいのではないか。例えば、農業もそうだが、歩いているとおじさんが昔話をしてくれたということも教育だと思う。様々な社会教育、まちの中で学ぶ教育も含めて、高品質の教育をする場所がここだという定義付けをすると、教育水準の高いエリアができるし、ここで育った子どもは非常におもしろいという子が育つ感じがする。そういう枠組みがよいかもしれない。

嶋田委員長　　ルイス・カーンが「都市っていうものは、朝に少年が出かけて行って、夜帰ってくる頃には自分が一生かけて取り組む仕事が見つかってくるようなそういうところのことを都市というんだ」と言っている。建築家も結構捨てたものではないと思うが、格好いい大人に出会えるというのが、最高の教育、学びの機会でもある。農業に関しては、三浦市で無農薬野菜や有機野菜を、JA を一切通さずに直接飲食店に売っている。JA を通して食卓に届く野菜は、収穫から５、６日たっている。朝採った野菜がその日の夜に食べられるので、新鮮さの度合いが全然違う。ただただうまい。そういう近郊の農業は飲食店と結びつけることで、付加価値の高いビジネスとして成り立つと思う。草加市は近郊農家が残っており、我々と同じような世代が農協を通さずに売っている。自分たちでも消費し、飲食店で使い、近郊の飲食店にも売り、給食にも使っている。まちなかで育てた野菜をそのまちなかの子どもたちの給食に使っている。大して広い農地ではないが、子どもたちの農業体験も行っている。そういうのは、学びとして大事。そういう学校の勉強だけではないものを、様々な観点から教育につなげられると思う。教育にしたほうがよいと思ったのは、実は北九州の戦略的な都市政策は、雇用を生み出す

ことで、女性は起業という雰囲気になっている。北九州は、はっきり言うと、明治以降のぽっと出のまち。和歌山には歴史の積み重ね、御三家がある。特に和歌山の女性の方が住みたい、暮らしたい、子育てをしたいと思うまちにならない限り、価値は高まっていかない。リノベーションスクールやこの委員会にも、できる限り女性に参加していただきたいというのが、市職員の願いでもある。そういうときに、女性は起業しましょうというのは、和歌山の女性とは異なるのではないかと思う。自分が学ぶ、自分の子どもに良い学びの機会があるというテーマであれば、女性が行動を起こしてくれるのではないか。今日ここにいる和歌山市民の皆様の感覚を伺いたい。そこを議論していただきたい。

吉川委員　農業をする人が減っているが、菜園を作るというのは最初の入り口にとてもよい。小さい頃に経験したことで、将来能力のある人間になる可能性が非常に高い。

梅田委員　若い女性が農業をやりたくて農業を始めたという JA のコマーシャルがある。また、銀座のクラブのママたちがしているミツバチプロジェクトという、屋上でミツバチを飼い、蜂蜜を作り、お米を作って、稲刈りをするというのを聞いたことがある。市内でもできるのではないか。

嶋田委員長　フォルテワジマの屋上でやるとよいと思う。ミツバチが住めるというのは、農薬の使われていない緑がその半径１キロの範囲にあるということ。ミツバチはそこから半径１キロの範囲からしか蜜を採らない。超ローカライズされたもので、そこの１キロの範囲内にどんな植生があるかにより、その季節ごとに蜜の味が変わる。ミツバチが蜜を採ってくるということは、農薬散布されていないということ。和歌山のまちなかでミツバチを飼えるということは、まちなかにいい緑がたくさんあるという証明になる。

豊田委員　ぶらくり丁商店街で昨年純粋なニホンミツバチが見つかった。一般のセイヨウミツバチよりもよいということで売り出しているが 110 グラムで 2,500 円する。そこで伸び悩んでいる。たれ蜜は 100 グラム 3,000 円。フォルテワジマでやれば、単価が安くなると思う。

嶋田委員長　産業化するということより、そこで採れて、それが学びの機会にもなるということ。まちなかに農園がある場合は、ミツバチがいれば受粉させるので、ミツバチをこの循環に入れるのはよいと思う。

永瀬委員　　地元の和歌山大学として、教育について思うところもある。伏虎義務教育学校ができるということで、和歌山市が大学を３校誘致している。これを生かさない手はないと思っている。和歌山大学の観光学部ができるときに、中心市街地活性化の計画が立てられた。観光学部を中心に誘致をし、そこでまちの人と一緒に活性化プログラムをできればよいという構想を考えたが、大学と市で条件が折り合わなかった。そういう過去もありながら、今回改めてまちなかに誘致するという話があり、喜ばしい。ただ、単に誘致するだけの発想になっていると思う。学生、若者がここに来たときにどういうライフスタイル、具体的な暮らしを実現するのか、その仕掛けがまちのなかにできているかということとセットでなければ、単なる大学誘致で終わる。４年前に和歌山大学に来て、地方大学がいかに非常に厳しい経営状況を迎えているかがわかった。学生が集まってこなければ大学自体がつぶれてしまうということにもなりかねない時代である。まちが魅力的だからこのまちで学生生活を送りたいという面がある。まちなかに学生を誘致するのはよいが、まちなかの魅力を高める、それは水辺を生かすとか、緑とか、農家とか、地域の人との協働、交通などの複合的な仕掛けをトータルでやらなければ、結局学生が定着しない。この構想にそういうアイデアが埋め込まれると非常によい。

嶋田委員長　　このままだと、駐車場に共同住宅がたくさん建ち、それが空き家として残る可能性があるため、政策でうまく誘導するほうがよい。

８　本日のまとめと次回の案内
（嶋田委員長　外）

９　閉会

（当日の様子）